

探究・校務改革 支援補助金 2025

令和6年度補正予算
地域未来人材育成支援民間サービス等利活用促進事業費補助金



探究的な学びの高度化/教職員の校務負担軽減を目指して

効果報告レポート

【事業者名】

株式会社a.school

【サービス名称】

探究PARTNERS / プロジェクト部

【サービスの支援項目】

カテゴリ-1 探究的な学びの高度化 メインサービス

2026年1月

探究 PARTNERS 全国拡大中！



日本初！探究学習のフランチャイズ*

*幼児・小学生対象

グッドデザイン賞受賞の探究学習プログラム

「なりきりラボ®」「おしごと算数®」

「あそびツクール®」



経産省「未来の教室」事業採択
(2018年度)



■ 探究・校務改革支援サービスの概要：プロジェクト部

1. サービスの概要、特徴

プロジェクト部は、生徒がオンライン上で他校の生徒や外部の大人とつながり、協働・発表・フィードバックを通じて探究を前に進める学習基盤である。加えて、学校の探究活動でつまずきがちなポイント（問いの立て方、観察、調査、発想、議論、プレゼン、表現など）を補うため、探究スキルをモジュール型で鍛えるプログラムを組み合わせて提供できる。

(1) 導入によるメリット、類似サービスとの違い等

一般的なオンライン学習（視聴・課題提出中心）や単発の外部講師授業と異なり、①探究の継続性（学期をまたいで進められる）、②社会接続（校外の他者と出会い、視点が増える）、③プロセス介入（必要なスキルをピンポイントで補強できる）を同時に実現できる点が特徴である。

(2) 学習に関連する効果又は業務効率化・利便性等に関連する効果

生徒にとっては、他者に伝える前提で思考を整理する機会が増え、言語化・表現の質の向上や、問いの深まり、プロジェクトのやり切り（遂行力）につながることを期待される。教職員にとっては、外部連携や発表機会の設計を一から行わずとも、プロジェクト部の枠組みを活用して、「外部へ開く探究」や探究のプロセス支援を実装しやすい。また、2コマから導入でき、単体／組み合わせが可能なため、学校の年間計画に合わせて柔軟に組み込みやすい。

(3) サービスの活用場面

- ・ 総合的な探究の時間で生まれたテーマを、学期をまたいで継続・発展させたい場面
- ・ フィールドワークや課題設定の前後で、問い・観察・調査などの探究スキルを底上げしたい場面
- ・ 校内発表で終わらせず、他校・外部の場で発表し、フィードバックを得て深めたい場面
- ・ 探究が停滞している学年・クラスに対して、議論・発想・プレゼン等のプロセス介入で再点火したい場面

(4) 1サービスあたりの標準価格

利用者1人あたり 月額11,000円（税込） ※システム利用料・部活動企画運営費・コミュニティ運営費・事務管理費を含む

2. サポート内容（サービスの利用に際しての自社のサポート体制等）

導入校の目的（探究のどのフェーズを強化するか／外部発表をどう位置づけるか）に合わせ、運用設計・年間計画への組み込みを支援する。具体的には、①導入オリエンテーション、②プログラム選定（組み合わせ設計を含む）、③実施前後の運営フォロー、④実施後の振り返り（学習効果・改善点整理）までを一体で行う。なお、授業実施を教職員主体で進められるよう、教材一式（スライド・ワークシート・運営ガイド等）を整備し、必要に応じて教員向け説明会（オンライン）も実施する。

■ 探究・校務改革支援サービスの概要：探究PARTNERS

1. サービスの概要、特徴

探究PARTNERSは、探究・PBL・STEAM・デザイン思考／アート思考等、最新の学習理論を踏まえたオリジナルカリキュラムを、全国の導入パートナーとともに届ける仕組みである。

(1) 導入によるメリット、類似サービスとの違い等

教材提供にとどまらず、授業設計・運営の要点をパッケージ化して提供することで、学習者の主体性を引き出す探究プログラムを、現場で再現しやすい形にしている。特に「なりきりラボ」「おしごと算数」等のラインナップは、単なる体験で終わらせず、観察・試行・表現を通じて“探究の入り口”をつくる点が特徴で、複数教科を横断する学び（算数／作文／理科実験／工作／アート／プログラミング等）へ接続できる設計思想を持つ。

(2) 学習に関連する効果又は業務効率化・利便性等に関連する効果

学習者にとっては、「やってみたい」から始まり、試行錯誤し、言葉や作品で表現するという探究プロセスを、年齢に応じた形で経験できることが主な価値となる。提供側（学校・教員）にとっては、授業の勘所（進行・準備・問いかけ・場づくり）が整備されていることで、ゼロから設計する負担を抑えつつ、探究学習を実施しやすい。また、探究を扱う際に重要となる講師の姿勢（探究する態度／子どもに寄り添う）を重視し、育成・支援の仕組みを持つ点も運用上の安心材料となる。

(3) サービスの活用場面

- ・ 総合的な探究の時間・特別活動・探究イベント等での導入（短期の体験～継続型まで）
- ・ 探究の“型”づくり（観察・試行錯誤・表現）を学年の共通体験として入れたい場面
- ・ 教科横断（算数×仕事／理科×ものづくり／作文×表現／アート×発想等）の実践を、無理なく組み込みたい場面
- ・ 小学生～高校生まで、年齢に応じて段階的に探究体験を設計したい場面（学びの接続）

(4) 1サービスあたりの標準価格

1教室あたりの月額費用 33,000円（税込） ※教材使用料・実践サポート費・システム利用料を含む

2. サポート内容（サービスの利用に際しての自社のサポート体制等）

導入時に必要な「再現性」を高めるため、授業実施のための一式（授業スライド、運営ガイド、進行表・準備物リスト、オリジナル探究ワーク等）を提供する。また、講師（教員含む）が相談できるコミュニティ（チャット）を用意し、実施中の疑問や改善相談をしやすい運用を支える。加入に際しては、オンライン面談や授業見学等を通じて、提供側の姿勢・運営品質が担保される形で進める。

■ 学校等教育機関の課題と解決策

探究は広がる一方、現場では形骸化しやすく、教員負担も大きい。本事業は「協働・発表の場」×「探究スキル教材」で、探究を継続的に深め、社会と接続する。

児童生徒・教職員が抱える課題

〈児童生徒側の課題〉

- 問いが立たない／テーマが浅い：興味関心の掘り下げが弱く、探究の出発点で止まりやすい
- 調べて終わる・まとめて終わる：情報収集はできても、検証・試行錯誤・表現へ進まず、学びの実感が薄い。
- 協働や対話が表層化する：議論の仕方がわからず、意見が出ない／合意形成ができない。
- 発表が形式化する：誰に何を伝えるかが曖昧で、言語化・構造化が育ちにくい。
- 継続しにくい：学期・学年が変わると活動が途切れ、プロジェクトが「やり切り」に至らない。

〈教職員側の課題〉

- 設計負担が重い：問いづくり、プロセス設計、教材準備、評価までを自前で組むのが難しい。
- 経験依存・属人化：探究の得意な教員に集中し、学年・クラス間で質がばらつく。
- 外部連携のハードル：他校交流や社会接続（企業・地域等）を実現したいが、調整・運用の工数が大きい。
- 「探究らしさ」の判断が難しい：どの介入が適切か、どこまで求めるべきかの共通理解が作りにくい。

サービスが果たす役割

探究の推進力をつくる

- 他校の生徒・外部の大人との交流／共同プロジェクト／発表・フィードバックの機会を提供し、探究を「校内完結」から「社会とつながる学び」へ拡張する。
- 伝える相手が生まれることで、生徒の言語化・表現が自然に要求され、学びの質が上がりやすい。
- 継続的な活動の場があることで、探究が途切れにくく、やり切りまで到達しやすい。

探究の“つまずき”を補強する

- 問い・観察・調査・実験・発想・議論・プレゼン・表現といった探究プロセスを、モジュール型プログラムとして提供し、必要なスキルをピンポイントで底上げする。
- 2コマから導入でき、単体／組み合わせが可能なため、学校の年間計画や実態に合わせて柔軟に組み込みやすい。
- 教材・進行ガイド等を整備し、教員の準備負担を軽減しつつ、授業の再現性を高める。

■ 探究・校務改革支援補助金における活用場面

サービスの活用風景・授業の流れ

① 課題活動 × 比較的長めのプロジェクト型

学校内の課題活動（行事づくり・地域連携・校内改善等）を「作業」で終わらせず、問いを起点にした探究プロジェクトとして推進することを狙い、探究PARTNERS／探究道場のフレームで活動を「やること」から「問い」へ翻訳し、観察・調査・発想・議論・表現といった探究スキルをプロジェクトの局面に応じて使い分けながら進めた。途中段階ではプロジェクト部を通じて他校生徒や外部の視点に成果物や進捗を共有し、質問・コメントを受けて方向性や根拠を更新することで、活動を社会と接続しつつ成果の質を高めた。



② 課題活動 × 限られた複数コマでのプログラム実践

限られた時間の課題活動でもやりっぱなしを防ぎ、短時間で学習としての質（問いの精度、根拠、アウトプットの伝わり方）を引き上げることを狙い、探究PARTNERS／探究道場を「型の注入」として活用して、観察の視点や調査設計、議論の進め方、表現の組み立てを短時間で揃えた。最後にプロジェクト部で外部に向けて途中成果を共有し、短い反応でも第三者のフィードバックを得ることで振り返りを具体化し、次の改善点が明確になるように設計した。



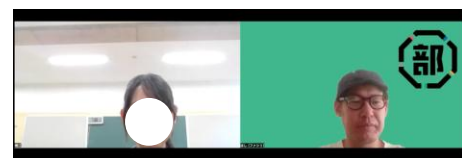
③ 総合探究・学習の時間 × 比較的長めのプロジェクト型

総合探究が「調べて発表して終わる」形骸化に陥ることを防ぎ、探究を継続的に深めて社会と接続する学びとして運用することを狙い、探究PARTNERS／探究道場を学年の共通言語として位置づけ、問いづくりから調査・検証、議論、プレゼン・表現までをプロセスとして支えた。あわせてプロジェクト部を継続的な外部発表・交流の場として組み込み、他校生徒や外部からの問い返しを受けて問いを更新し、探究の深まりを生むサイクルをつくることで、生徒の言語化・構造化ややり切る力の向上につなげた。



④ 総合探究・学習の時間 × 限られた複数コマでのプログラム実践

総合探究の中で停滞しやすい局面（問いが浅い／調査が雑／議論が進まない／発表が形式化）に対して短期介入で探究を再起動させることを狙い、探究PARTNERS／探究道場を単元内のテコ入れとして差し込み、問いの再設計や調査設計、議論の型、表現の構造化を集中的に扱った。さらにプロジェクト部で途中成果を外部に共有してフィードバックを得ることで論点を整理し、次の一手を具体化して探究を前進させ、短期間でも成果物の質と学習の納得感が高まる運用とした。



本事業においてサービスを導入した学校設置者数・学校等教育機関数

学校設置者数	9	学校等教育機関数	12校
--------	---	----------	-----

	学校設置者名	学校等教育機関名	所在地	学校種	学年	実施内容
1	青森県教育委員会	青森県立百石高等学校	青森	高等学校	高1~3	総合探究、国語
2	青森県教育委員会	青森県立三本木農業恵拓高等学校	青森	高等学校	高1~2	総合探究
3	京都府教育委員会	京都府立福知山高等学校	京都	高等学校	高1~2	課外学習
4	学校法人日本大学	日本大学高等学校	神奈川	高等学校	高1	課外学習
5	学校法人日本大学	日本大学中学校	神奈川	中学校	中1~3	課外学習
6	学校法人佼成学園	佼成学園中学校	東京	中学校	中1	総合学習
7	学校法人共立女子学園	共立女子高等学校	東京	高等学校	高1~2	課外学習
8	学校法人共立女子学園	共立女子中学校	東京	中学校	中3	課外学習
9	学校法人稲置学園	星稜高等学校	石川	高等学校	高1~2	課外学習
10	学校法人鶴学園	広島なぎさ中学校	広島	中学校	中1~3	総合学習
11	学校法人日吉学園	とさ自由学校	高知	小学校	小1~6	総合学習、プログラミング
12	NPO法人エデュケーションエキューブ	スタディプレイス	福岡	フリースクール	小4~高3	総合学習・探究

【児童・生徒の探究学習】【教職員の業務効率化・省力化】等サービス活用による成果

定量的効果検証

本事業では、導入校10校を対象に、プロジェクト部と探究PARTNERSを活用し、探究学習の質の底上げを図った。

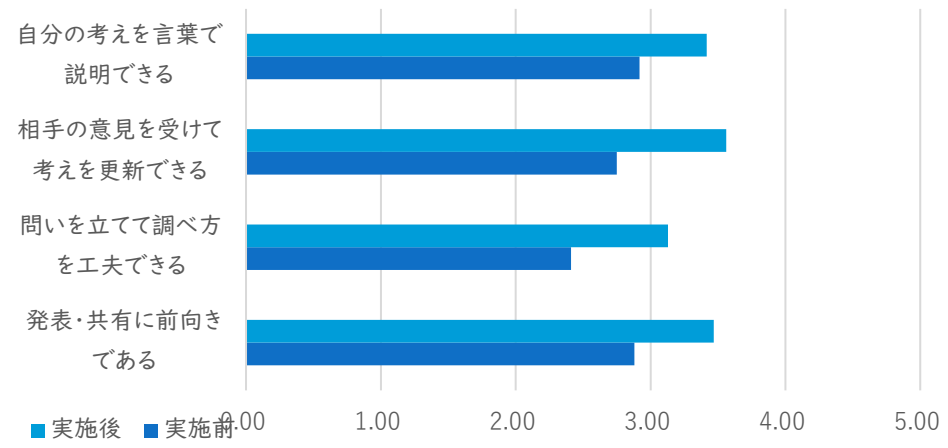
5段階評価のアンケート(1=全くそう思わない~5=とてもそう思う)による定量評価では、学習者(生徒)側の変化として「自分の考えを言葉で説明できる」「相手の意見を受けて考えを更新できる」「問いを立てて調べ方を工夫できる」「発表・共有に前向きである」などの項目で、平均値の大幅な上昇が見られた(0.5ポイント以上の改善)。特に、「問い」の探究プログラムを実施した学校では「言語化の具体性」、他者への共有機会を設けたクラスでは「発表・共有への意欲」や「考えの更新」の伸びが大きいなど、プログラム特性に応じて探究的な姿勢・スキルが向上したことが示唆された。

教職員側の定量評価では、特に「探究の全体像を見通して授業を運営できる」「探究の授業準備をスムーズにできる」「探究活動中の生徒への声かけを効果的にできる」等の項目で大きな改善が見られた。特に、教材一式(スライド・ワーク・運営ガイド等)を用いることで、授業設計の属人性が下がり、学年内で共通の指導観点を持ちやすくなった点が、運用上の効果として確認された。

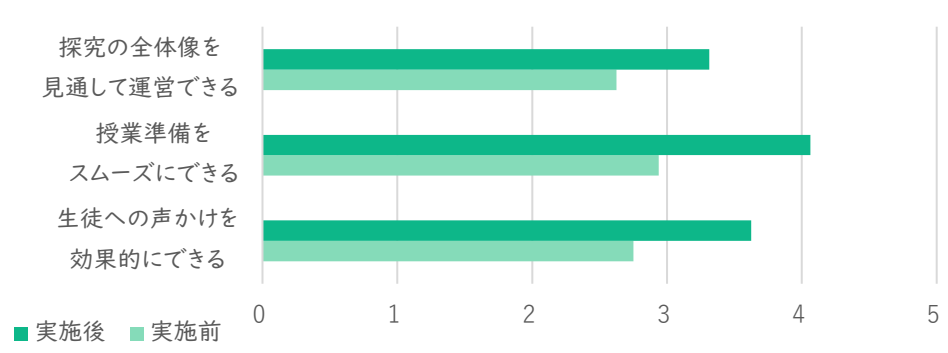
【アンケート調査概要】

- ・対象:導入校10校のプログラム参加生徒/担当教職員
- ・回収数(母数):生徒 n=1,051/職員 n=16
- ・実施時期:各校の実践終了後に実施

【生徒の主な調査結果】



【教員の主な調査結果】



■【児童・生徒の探究学習】【教職員の業務効率化・省力化】等サービス活用による成果

定性的効果検証

定性的には、各学校現場で教員が「つまずきが多い」と感じていた特定のパート・プロセスに対して、そこに特化した支援を設計・投入できた点
が大きい。従来は、テーマ設定の停滞や調査の浅さ、議論の停滞、表現の形式化といった課題に対して、個別対応に寄りがちだった。しかし本事業
では、探究プログラムの枠組みに沿って必要な場面に介入し、生徒に「問いの立て方」「観察・調査の進め方」「議論の型」「表現の構造」など
の型を明示的に伝えることで、学年・学級全体の底上げにつなげることができた。

また、外部との学びの接続機会を設けられた学校では、探究が「校内発表のための作業」から「外部に伝え、学び取って改善する活動」へと意味
づけが変化した。他校生徒や外部の大人から質問・コメントを受けることで、自分にはない視点を吸収したり、仮説の弱点や追加調査の必要性に
気づいたりする場面が生まれ、探究の改善サイクル（共有→問い直し→再調査→再表現）が回りやすくなった。その結果、探究の深まりが促され
ると同時に、生徒の主体性や学習への納得感も高まる方向に作用した。

教職員にとっては、探究プログラムが「授業づくりの共通言語」になったことで、指導観点の統一と省力化が進んだ。たとえば「問いを一段深め
る」「根拠を増やす」「比較する」「仮説を検証する」「伝える相手を想定する」といった観点を学年・教科を越えて共有しやすくなり、生徒への声
かけが“感覚”ではなく“観点”として揃うことで、支援の一貫性が高まった。

（考察の主な根拠：教職員へのヒアリング結果）

■探究・校務改革支援サービスを活用した児童・生徒・教職員等のコメント感想等

1) 生徒の声

- 「四コマ漫画や絵本をつくるのが想像以上に楽しくて、授業の時間だけじゃ足りなくて家でも続きを描きました。最初は“とにかく描けばいい”と思っていたけど、途中で『この場面、読む人は分かるかな?』『ここは言葉を変えた方が伝わるかも』って考えるようになって、直したり作り直したりするのが当たり前になりました。完成したときは“作品を作れた”だけじゃなくて、“前より説明できる自分になった”感じがありました。」
- 「起業家のプランづくりは最初、正直むずかしくて、何から考えればいいのか分からなかったです。でも、順番に考える枠があって、話しながら整理していくうちに、『自分は誰の何を解決したいのか』が少しずつ見えてきました。最後に“自分のプラン”として形にできたときは、調べただけの発表じゃなくて、ちゃんと“考えて決めた”って言えるものになった気がしました。」
- 「言葉で説明するのが苦手で、発表もあまり得意じゃなかったけど、途中で投げかけてもらう質問が具体的だったので、『何を言えばいいか』が分かるようになりました。やっていることを一回言葉にすると、次に何をすればいいかも決まりやすくて、最後まで離脱せずに続けられました。自分でも“続けられた”ことがいちばん意外でした。」
- 「探究って、今までは調べてまとめるだけで終わってたけど、途中で外部の人に見せる機会があると、質問で『そこ、根拠ある?』とか『それって結局何が言いたいのか?』って返ってきて、あ、これは直さなきゃって思いました。恥ずかしいけど、そのおかげで“調べたこと”が“自分の主張”に変わっていく感じがあって、最後の発表が前より自信を持ってできました。」

2) 教員の声

- 「教材の質が高く、探究のプロセスが“型”として用意されているので、授業の組み立てや声かけがしやすかったです。小学生には少し難しい部分もありましたが、伴走して問いを具体化したり、言葉を補ったりすることで、単なる体験ではなく“考える学び”として成立しました。特に、言語化に課題を抱える子の変化が見えたときは、こちらも驚きました。」
- 「特性のある子で、普段は離脱しやすいタイプの子が、最後まで継続できたのは大きな収穫でした。『何をすればいいか』がはっきりしていること、途中で言葉にする場面があり小さく達成感を積み上げられることが効いたのだと思います。こちらも“できていない所を埋める”ではなく、“少しずつ前に進む”支援に意識を切り替えられました。」
- 「総合探究は、教員側が“自由にやっていい”と言った瞬間に、生徒が何をしたいか分からなくなりがちです。しっかりと枠組みがあることで、問い・調査・検証・表現のどこで詰まっているかを判断しやすくなり、必要な介入がしやすくなりました。結果として、指導が属人化せず、複数教員でも共通の観点で生徒を支えられる感覚がありました。」
- 「外部に向けて共有する機会を入れると、生徒の“本気度”が変わります。校内発表だと形だけ整える班も、他校や外部から質問が来る前提になると、根拠を確認したり、言葉を選び直したりする。教員が細かく指示しなくても、フィードバックが次の行動を生むので、学習が自走しやすく、授業運営上の負担感も下がりました。」

導入時に顕在化した課題は「年間計画への組み込み」「教職員の共通理解と伴走負担」「学年差・特性への配慮」の3点であり、実施モデルを整理した運用マニュアルの整備によって、学校ごとの調整コストを下げつつ安定運用を図る。

直面した課題

- 時間割・年間計画への組み込みの難しさ:総合探究の中で効果的に配置するには、学校ごとの年間計画・評価計画と整合させる必要があり、初期設計に一定の工数がかかった。
- 教職員側の共通理解(“探究の型”の共有)と伴走負担:探究の進め方や声かけ観点が教員間で揃っていないと、学年・クラスで運用の質がぶれやすい。また、生徒がつまずいた際の伴走をどう分担するかが課題になり得た。実際に、共通理解を形成するための場や時間を十分に確保できた学校と、そうでない学校とでは差が見られた。
- 生徒の学年差・習熟差・特性への配慮:教材の一部は、学年によって難易度差が出やすく、言語化が苦手な生徒や特性のある生徒に対しては、ペース配分や表現手段の選択など個別の配慮が必要だった。

解決するための改善策

それらの3課題をまとめて解決するため、学校現場での実装を前提に、実施モデル(運用パターン)を整理し、運用マニュアルを磨き込む。

具体的には、学校の状況に応じて選択できる標準パターンを明確化し、各パターンについて「年間計画へのはめ込み方(評価計画との接続を含む)」「授業内での探究の型(問い・観察・調査・議論・表現)の扱い方」「教員の役割分担・伴走の観点(声かけ例・つまずき別対応)」「学年差・特性への難易度調整(用語の言い換え、テンプレート、表現手段の複線化、ペース配分)」までを一体で整理する。

これにより、導入時の設計工数を削減しつつ、教員間で支援観点を揃え、多様な学習者が参加しやすい形で安定運用できる状態を目指す。

■会社概要

社名	株式会社a.school
代表	代表取締役 岩田拓真
設立年月	2013年9月5日
本社	東京都文京区本郷4丁目1-7 近江屋第二ビル601号室
資本金	500万円
売上高	非公開
従業員数	約20名
事業内容	<ul style="list-style-type: none">探究学習塾の運営探究学習プログラムのフランチャイズ展開教材・教育プログラムの企画・開発学び・教育分野における新規事業・サービスの共同開発企業・自治体・学校向けの教育コンサルティング、人材育成支援学び・教育に関する調査研究、執筆、講演、イベント運営

■お問い合わせ窓口

担当：岩田拓真

電話：090-7346-8976

Mail：t.iwata@aschool.co.jp